

当面のスローガン

- 本年こそ「人権侵害救済法」を制定させよう!
- 狭山再審闘争の勝利をかちとろう!
- 続発する差別事件の糾弾を徹底しよう!



発行所  
解放新聞和歌山支局

〒640-8314  
和歌山市神前 405-3  
TEL 073-473-2301  
FAX 073-473-2302

発行責任者  
中澤敏浩

## 第59期 県連解放学校



先人の思いをうけつぎ、まい進しようといさつする松本貞次・執行副委員長

はじめに、藤本哲史・県連書記長から基調提案で「今年は74年10月に第19回県連再建大会がひらかれて40年を迎える。「解放運動を部落大衆の手に」をめざし、本来の運動をとりもどすため、多くの同盟員と

ともに、再建大会を勝ちとつて以来、和歌山県の部落の完全解放への道を歩みつづけている。Y住宅販売会社の差別事件をはじめ、部落への忌避意識が表面化した事件が多発しているが、水平社宣言の「人間を尊敬する

県連解放学校を7月6日、プラザホープでひらき、同盟員はじめ、今年映画「ある精肉店のはなし」上映会&講演会ということで、行政や学校関係者にもよびかけ、256人が参加した。

# 『解放運動を大衆の手に』 県連再建大会をむかえ

## 県連解放学校



つぎに、12年3月に閉鎖された貝塚市の屠畜場で、家業として精肉店を営む北出精肉店を記録した映画

## 映画「ある精肉店のはなし」

ことよって自ら解放せんとする者の集団運動」と人間をいたわる事が何であるかをよく知っている吾々は、心から人生と光を願求礼賛する、すなわち部落

解放運動の原点は人間にたいするやさしさと信頼といえる。このことが90年以上も運動を支えてきた根本である」と締めくくった。

「ある精肉店のはなし」を上映した。上映後、北出新司・北出精肉店主と額額あや・監督をまねき対談した。

### 「生」の本質を問う

額額・監督は「はじめて部落問題にであったのは高校のころだがうる覚え。20代後半に写真家の本橋成一のもとで仕事をしていたときに、写真集「屠場」に使われた写真をみて、身動きができ

なくなつた。その写真はエネルギーを放出していて美しかった。思い描いていた無機質で機械的で悲壮感漂う光景から大きくかけはなれていた。はじめて見学した屠場では、熱く活気があり、とても危険な仕事で命がけ。これを知らずして肉を食べていたことにショックだった」と語った。

### 差別への地域のうめき声を

北出さんは「地域から出たい一心だったが、親父からお前で7代目だと聞かされ、店を継ぐのは使命かなと思うようになった。102年つづいた屠場を12年で閉鎖することを決めていたので、ひっそり屠場を閉めたかったが、額額監督から牛を飼う肉にして売る。家族でやってきたこの仕事を記録したいという申し出があった。記録するということとは、家族を説得しなければならぬし、地域の差別にもかかわらず。そこに生きてきた文化である盆踊りは差別への地域のうめき声でもある。偏見も含めて背負ってきた地域の差別を抜きにして記録はできないとお断りしたが、額額監督の人ごとではない熱い思いに打たれた」とほほ笑んだ。

## 頑健

今年、69回目の終戦日を迎えた。日本だけでも数百万人の軍関係者や民間人の犠牲を強いた戦争も戦争体験者や家族のほとんどが亡くなり、広島・長崎・沖縄でもその体験を伝える人も少なくなつてきた。当日、テレビの街頭インタビューに笑いながら応えていた若者が映し出されていたが、その多くは戦争があったことすら知らなかった▼自民党の古賀誠・元幹事長が「今、戦争を知らない政治家がほとんどで、平和の重さをまったく理解していない」と嘆いていたが、戦争を知らなくても、平和の重さを理解していかなくても事実は事実、70年前に戦争があった。しかも、日本がその当事者(加害者)だったのだ。それは、アジアの人びとだけでなく、日本人自身にたいしてもである▼先日、長崎市長が政府の「集団的自衛権行使容認」に警鐘を鳴らしていた。また、テレビの特番で、防衛大学出身者らで構成されている自衛隊幹部候補生学校が取材されていた。彼らへのインタビューで印象に残ったのが「それまでも実弾訓練の機会があったが、訓練のための訓練の観であった。しかし、最近『生命』や『戦闘』にリアリティを感じる」と言ったことである▼戦争当時、ドイツやイタリアと三国同盟をすすめた松岡洋右外相は「戦争のためには、大きな誤りだった」と語っていたが「集団的自衛権行使は、日本人の生命と平和を守るため」との安倍さんの発言とどこか似ている▼世の中の原理は「人間の尊厳」であり「平和」である。そして、私たちに声を大に叫び、確実に語り継ぐことが求められている。(S・I)